

ここで言ったらいいやん

チナ

「痛い」という言葉。

それは本人も周りをも不快にさせる言葉である。

私は7年前に脊髄腫瘍の手術をし、その後遺症として、腹部ぐるっと一周のやけどのような痛みが残った。

そこで私はペインセンターの扉をたたくこととなった。

ペインの先生はブロック注射や薬をあらゆる角度から攻めてくださったが、その効果は良くなく、毎週のように通うペインの先生には「痛いです」が挨拶代わり。

眉間にしわを寄せて、身体を縮め、車いすで受診。眉間のしわは、終日続いていて、しわが伸びたことはその頃なかったように思う。

家に帰っても、痛みのせいで動くことができず、ベッドにうづくまる生活。

「痛い」「痛い」。精神的にも追い込まれていた。きっとそれを聞いていた家族もつらかったことだろう。誰も幸せにならない言葉。私はできるだけそれを封印することにした。

一筋の光がみえた。それは、脊髄刺激療法である。不安がる私に先生は丁寧に仕組みを教えてくださいました。

先生の手は神の手。注射や麻酔も痛くない。

丁寧な説明と神の手、そして冷静な言葉遣い、時折見せる笑顔、それらが私を安心させてくれた。

脊髄刺激療法のおかげで痛みは以前よりは減ったものの、まだ日常生活に支障のある程度の痛みは残っている。

「どう?」「痛いです」その繰り返し。

それでも先生は聞いてくれた。「どう?」って。

正直私は思う。もう、回復の見込みが少ない慢性の患者。口を開けば「痛い」ばかり。

面倒なのではないか。

鬱陶しいのではないか。

飽きたのではないか。

見捨てられるんじゃないか。

でも先生は聞いてくれる。「どう？」と。

私は「痛いです」といいつつも申し訳ない気分でいっぱいになっていた。

先生はこんな患者にも一生懸命色んな方向から痛みを解消しようと頑張ってください。私もそれに応えたい。でもそれができない。ごめん、先生。ごめん。

時折出る言葉、「先生、ごめん」「痛いばかり言ってすみません」

でも先生は「それが仕事だから大丈夫」とずっと受け流してくれる。

そして、こうも長い付き合いになると、痛み以外の話もし始める

私にとって先生はペインの先生であり、カウンセリングの先生でもあった。

「子供たちが学校に行かなくて・・・」

そんなことまで漏らしたりして。

私の中で、何かあれば、「ひとまず、先生に聞いてみよう」という図式が出来上がっていた。

「先生、最近痛いねん。でも、痛いって言えないねん」

「ここで言ったらいいやん。」

いつものトーンで、いつものように受け流してくれる先生。

今は眉間のしわも随分薄くなり、時折笑い声も立てながら、受診している。

誰一人幸せにならない言葉「痛い」

でもその言葉が先生とわたしを繋げてくれた。そしてその言葉を先生が全て受け止めてくれた。

先生の言葉に救われ、甘えながら、今もこれからも痛みと共存していく。